

●——1時間目の授業（現代国語・漢詩 藤原先生）

幾たびか辛酸を歴て 志始めて堅し
丈夫は玉碎するも甄全を恥づ
一家の遺事 人知るや否や
児孫の為に美田を買はず―

藤原先生が黒板に書いた文章を一瞥したマリ。

「……西郷隆盛」

そうつぶやくと窓の外へと視線を移した。

グラウンドで100メートル走のタイムを計っている生徒たちが見える。2年B組とC組の合同体育の授業だ。両組の男子全員がスタート地点に注目をしている。それもそのはず、スタートラインに立ち、ピストルの合図を待っている走者の一人は、学園一の美少女、B組の南総サトミ。そしてもう一人は文化系男子からの人気がもつとも高い、C組の那須シズカ。

この熱い女の戦いに、両組の男子は萌えていた。

先に走り終えた女子生徒が、そんな男子たちの様子を見て、スタート地点を睨みつけた。「調子のつてんじゃねえよ……」とつぶやいたのは【加藤セイコ 2年C組 ラクロス部部长】。

セイコは1年生の時、ラクロス部のレギュラーの座をかけてサトミと争い、破れた経験がある。苦杯をなめたセイコは、実力は自分のほうが上なのに、監督や先輩に媚びを売るサトミが選ばれたと、一方的に恨んでいた。しかし、朝から晩まで練習に打ち込む姿にチームの信頼を獲得。2年生になって、3年生が引退すると部長の座を手に入れた。

一方のサトミは部活一筋のセイコとは違い、友達との付き合いや恋愛も楽しみながら、自由奔放に学生生活を送っている。しかし試合ではいつもサトミが得点王。勝利の輪の中にはいつもサトミがいた。

そんなサトミにセイコは表面上仲良く接してはいたが、心の中では疎ましくて仕方がなかった。そんな彼女もまた、同じクラスの明智に好意を持っているのだが、ますます雲行きは怪しくなるばかりであった。

「シズちゃん、サトミ、どっちもがんばって……」

一人遠く離れた教室から、ふたりに向けて声援を送るマリ。

グラウンド中の生徒が見守る中、乾いた爆発音とともにピストルの煙が舞い上がった。

勢いよくスタートダッシュを切ったのはサトミだ。鹿のようなしなやかな体の動きが美しい。観覧する男子生徒の前を、躍動感に満ちた走りで駆け抜けて行く。目の前を流れて行くサトミの姿に誰もが吸い込まれた。

しかし、サトミの独走かと思われたこの勝負、シズカがゴール終盤になってサトミに並んだ。カチューシャの代わりに額に結んだ赤いリボンの端が後方へなびく。体操着姿の女子を直視することを恥じらっていた文化系男子にも火がつき、一層ギャラリーから歓声が上がる。

ほぼ同時にゴール。肩で息をするふたりのもとへ、ストップウォッチを持った生徒が駆け寄る。胸元で両手ガッツポーズをしたのはサトミだ。

ガタン！

直後、興奮したマリが思わず太ももで机を突き上げ、机の脚が床に着地した音が教室中に響い

た。

「あ、あれっ!」

思わず照れ隠しにつぶやいたマリだったが、幸い誰の注意も引いていなかった。前の座席に座る上田を除いて。

「僕らのアイドル、サトミンってか? シズカも惜しかったな」

「うん、ふたりともカッコ良かったね」

横目でマリの姿を捕らえている上田に返答をすると、マリはふたたびグラウンドへ目を向けた。すると、男女それぞれが一生懸命に走っている中、ジャージ姿で一人、階段に座っている男子の姿が見えた。

「明智くん……」

マリのつぶやきを聞いていたのか、「県内でも有数のスプリンターだったのにな、アイツ……」と上田が聞こえるようにつぶやき返した。

マリはノートの端を小さく切った紙片に『どうして明智くんは走らないの?』と書いて上田に手渡した。

先生に指名された石田が「男児は玉のように立派に死ぬべきである。つまらぬ者となって生きながらえるのは恥だ……」と黒板の一説をはきはきと訳読している。

しばらくして、上田が紙片をマリに戻した。その裏には小さな字で『夏にバイク事故で、左足の半月板を損傷しちまったらしい……』と書かれていた。マリには初耳だった。

1年の時の体育祭で、明智が3年生を抜いて100メートル走で優勝したのをマリは覚えている。思えば、その時から明智にかすかな恋心を抱き始めていたのかもしれない。

『もう完治してるんでしょ?』

マリが藤原先生の隙を見て、今度は壁際から上田に紙片を手渡した。

『骨折は治っても、膝の痛みはとれない』

上田から戻された紙片を読んで、マリは思わず「そ、そんな……」とつぶやき、ふたたび窓の外へ視線を向けた瞬間、「遠山、伝言……この次は人間観察の時間か?」と藤原先生。

(気づかれてたのね……)

気まずい表情を浮かべるマリであった。